2018 年 11 月 24 日　前橋聖書フォーラム

御国の福音

第 10 回：エゼキエル書と御国の計画[1]

目次

はじめに　p. 2

I.　去っていく神の栄光（8–11 章）　p. 3
II. エゼキエル書におけるイスラエルの回復：総論（20:33–44；36:22–28）　p. 4
III. エゼキエル書におけるイスラエルの回復：詳論（37 章）　p. 6
IV. 神の栄光の帰還と礼拝の回復（40–48 章）　p. 10

預言書における御国の計画のまとめ　p. 12

はじめに

A. 前回までの復習

1. 「神の御国／王国」（the kingdom of God）の計画について学んでいる。御国の計画は、聖書を貫く軸である。

2. イザヤ書、エレミヤ書における神の御国の計画
   (1) イスラエルはモーセ契約への不従順により裁かれ、約束の地から追放される。
   (2) しかし、神の無条件契約に対する忠実さに基づき、イスラエルは将来回復させられる。
   (3) イスラエルの霊的回復が、物質的回復（約束の地への帰還、約束の地での回復）の土台となる。霊的回復の鍵は新しい契約である。
   (4) イスラエルの回復は、ダビデの子孫である王なるメシアによってもたらされる。
   (5) 回復させられたイスラエルは、諸国民を祝福するという本来の使命を果たすようになる。その奉仕の中心となるのが、メシアによる全世界の統治である。
   (6) メシアの統治下においては、自然界も理想的な状態に回復させられる。

B. エゼキエル書について

1. エゼキエルは、紀元前 592 年から 570 年までの間、預言者として奉仕した。
   (1) 彼はバビロンに連行された後、捕囚の地において民にメッセージを告げる預言者として召された（1:1）。
   (2) 彼は祭司であった（1:3）。そのため、神の栄光や神殿、礼拝といったテーマに着目したメッセージが多い。
   (3) バビロンによるエルサレム陥落と神殿崩壊（前 586 年）までは、ユダおよび諸国民の上に神の裁きが下るという警告に重きが置かれた（4–32 章）。
   (4) 神殿崩壊以降は、イスラエル回復の希望のメッセージに重きが置かれた（33–48 章）。
   (5) エゼキエルのメッセージは、イスラエルの裁きと離散、そして回復と帰還を告げていた申命記 28–30 章のメッセージと完全に調和している。

2. 今回の内容について
   (1) 主にエゼキエル書 37 章、40–48 章を詳しく学ぶ。
   (2) 最後に、小預言書までも含め、預言書における御国の計画を要約する。

I. 去っていく神の栄光（8–11 章）

A. ポイント

1. 神殿から去っていく神の栄光（シャカイナグローリー）
   (1) 栄光は、契約の箱の蓋（贖いの座）の上で、ケルビムの間にあった（9:3a）。
   (2) 栄光は神殿の敷居へと移動した（9:3b）。
   (3) 栄光は一時的に戻ってきた（10:1）。
   (4) 栄光は再び神殿の敷居へ移動した（10:4）。
   (5) 栄光は東の門の入口に留まった（10:18–19）。
   (6) 栄光は神殿から去り、オリーブ山に留まった（11:22–23）。

2. 栄光が去った結果
   (1) 神の栄光は、出エジプト以来、イスラエルの間に臨在し続けてきた。
   (2) 神の栄光が離れてしまったということは、イスラエルにおける神政政治の王国が終わってしまったことを意味している。
   (3) イスラエルを「祭司の王国」とした神の御国の計画は、失敗に終わったかのように思われた。

3. 絶望の中にある希望
   (1) 新しい契約の希望がある（11:19–20）。イスラエルを「祭司の王国」とした神の御国の計画は必ず成就する。
   (2) 将来、新しい神殿において、栄光が東の門から戻ってくる（43:1–7）。
   (3) イエス・キリストの再臨との関係
      a) 神であり人であるイエス・キリストは、シャカイナグローリーが去ったオリーブ山に戻ってこられる（ゼカ 14:2–3；使 1:9–12）。
      b) キリストはエルサレムから全世界を統べ治められる（イザ 2:3–4；ゼカ 14:9）。

II. エゼキエル書におけるイスラエルの回復：総論（20:33–44；36:22–28）

A. 20:33–44 の大まかな解説

1. 33–36 節：裁きのための帰還

(1) 文脈は、離散の地における民の不従順に対する神の怒りである（1–32 節）。

(2) 神は不従順に対する憤りをもって、離散の民を治め、集められる（33–34 節）。

(3) 集められた民は「荒野」へ連れて行かれ、不従順のゆえに裁かれる（35–36 節）。（黙示録 12:14 では、神の裁きによる苦難の期間に、イスラエルが約束の地から荒野へ逃れると言われている。）

2. 37–38 節：裁きを通した聖め

(1) 民は神の「むち」の下を通らせられる（37 節 a）。

a) 神が羊飼いにたとえられている。

b) 羊飼いの「むち」（あるいは杖とも訳せる）の下を通るということは、その羊飼いの群れとして認められるということである（レビ 27:32 参照）[2]。

(2) 「契約のくびき」の下で、民のうち真の信仰者がより分けられる（聖別される）（37b–38 節）。

a) 聖別の結果、民は主こそ神であることを知る。

b) 民の聖別と神を知ることが関連しているので、ここでの「契約」は「新しい契約」のことだと考えられる[3]。

3. 39–44 節：イスラエルの回復

(1) 民は新しい契約によって聖められた結果、二度と神に反抗しなくなる（39 節 b）。

(2) 霊的回復の結果、民は約束の地で神に仕えるようになる（40 節）。

(3) ヤハウェこそ神であることをイスラエルに対しても、また諸国民に対しても証しするために、民の帰還が実現させられる（41–44 節）。

B. 36:22–28 の大まかな解説

(1) イスラエルが回復させられる理由（22–23 節）

a) イスラエルは不信仰により、主の御名を汚した。

b) 主はご自分こそまことの神であることを世界に示すため、イスラエルを回復させられる。

(2) まず神がイスラエルを約束の地に集められる（24 節）。

(3) 約束の地において、イスラエルは神によって聖められる（25–27 節）。

a) イスラエルの霊的回復は、聖霊によってもたらされる（26 節）。

b) 聖霊により、イスラエルは神に従順に歩むことができるようになる（27 節）。

(4) 以上のことにより、イスラエルは約束の地に住み、彼らは主の民となり、主は彼らの神となられる（28 節）。

C. エゼキエル書におけるイスラエルの回復：総論

1. イスラエルの帰還と霊的回復の関係

(1) これまで、イスラエルの帰還は霊的回復によってもたらされることを学んだ（申 30:1–3；エレ 3:12–44 など）。

(2) エゼキエル書 20 章および 36 章では、霊的回復に先行する不信仰の内の帰還についても教えられている。

(3) これまで学んだことと今回学んだことを合わせて考えることで、イスラエルが回復させられるプロセスの全体像が見えてくる。

2. イスラエルの回復のプロセス

(1) イスラエルは裁きを受けるために、不信仰な状態で約束の地に集められる。

(2) イスラエルは裁かれる。裁きの間、再び約束の地から「荒野」へ移される。

(3) イスラエルは、裁きによる苦難の期間を経て聖められ、霊的に回復させられる。

(4) 聖別の結果、イスラエルは再び約束の地に集められ、物質的に回復させられる。

III. エゼキエル書におけるイスラエルの回復：詳論（37 章）

A. ポイント

1. 文脈
   (1) この時点で、エルサレムはバビロンによって滅ぼされていた（33:21 参照）。南北に分裂した選びの民は、両者とも不従順によって裁きを受けた。
   (2) 35、36 章では、新しい契約の祝福としてイスラエルが約束の地で回復させられることが教えられていた。
   (3) 37 章では、これまでに教えられた内容が「幻」によって詳述される。
   (4) エゼキエル書においては、37 章は、イスラエルがひとつの民族として回復させられるという預言のクライマックスである。

2. 37 章のアウトライン
   (1) 干からびた骨の幻（1–10 節）
   (2) 神による幻の解説（11–14 節）
   (3) イスラエルの再統一（16–23 節）
   (4) 御国の設立（24–28 節）

B. 干からびた骨の幻（1–10 節）

1. エゼキエルの見た幻（1–3 節）
   (1) エゼキエルが見たのは、「平地」（新改訳第三版「谷間」）に干からびた骨が満ちているという幻であった。

   (2) この骨が象徴しているのは、「イスラエルの全家」、すなわち南北合わせたイスラエルの民全体である（11 節）。

2. 神のことば（4–6 節）
   (1) 神が「息を吹き入れる」とき、死んだようになっていたイスラエルは生き返る。
      a) 「息」や「霊」（14 節）と訳されているヘブル語「ルアー」は、息、風、霊などと訳すことができる。
      b) どの意味であるかは、文脈によって判断される。

(2) 復活／再生のステップ

a) 肉体の再生（6 節 a）

b) 生命の再生（6 節 b）

3. 肉体的再生（7–8 節）

(1) エゼキエルが神のことばを骨たちに向かって語ると、骨の上に筋肉や皮膚が再生した。しかし、息はなかった。

(2) イスラエルの全家は、まず肉体的再生を経験する。

4. 霊的再生（9–10 節）

(1) 神が息（ルアー）を吹き込まれると、肉体に命が宿る（創 2:7 参照）。

(2) これは、神の御霊（ルアー）によってイスラエルが霊的に再生させられることを象徴している。

C. 神による幻の解説（11–14 節）

1. イスラエルの現状（11 節）

(1) 「祭司の王国」として選ばれた民が、今や干からびた骨のようになっている。

(2) 約束の地から追放された民は望みもなく、神から断ち切られたようになった。

2. イスラエルの回復（12–14 節）

(1) 物質的回復

a) まずイスラエルは、霊的回復の前に「イスラエルの地に連れて」行かれる（12 節）。すなわち、彼らはまず不信仰のまま物質的に回復させられる。

b) 不信仰な状態での帰還ではあるが、この段階においても、背後で働く神の御手を知ることができる（13 節）。

(2) 霊的回復

a) 神の霊が注がれるとき、彼らは霊的に回復させられる（14 節 a)。

b) この霊的回復があって後、イスラエルはようやく約束の地で安心して住むことができるようになる（14 節 b)。

3. 37:1–14 の結論と現代的適用

(1) 36 章における「イスラエルの回復のプロセス」（p. 6）と合致している。

(2) 不信仰の内の帰還と民族／国家の再建は、神の御業である。
すなわち、20 世紀に起きたイスラエル国家の再建は、歴史を支配しておられる神の御業である。

(3) 霊的回復もまた神の御業である。肉体の回復が既に起こったならば、将来必ず霊的回復がもたらされる。

D. イスラエルの再統一（16–23 節）

1. もうひとつの幻

(1) 2 本の杖（ユダとエフライム）が 1 つとなるという幻である。

(2) ユダの杖と「エフライムの手にあるヨセフの杖」は、それぞれ南王国と北王国を象徴している。

2. イスラエルの再統一

(1) この幻は、将来イスラエルが再びひとつの民となるという預言である。

(2) 再統一のステップ

a) 民が世界中から約束の地に集められる。

b) 帰還した民全体に「一人の王」が立てられる。

c) 王のもとで、彼らはひとつの民となる。

(3) 再統一の結果

a) 再統一されたイスラエルはきよめられ、偶像崇拝に走ることはない。

b) 神とイスラエルのつながりが確立される。

E. 御国の設立（24–28 節）

1. 「わたしのしもべダビデ」（24–25 節）

(1) 再統一されたイスラエルに立てられる王は、「わたしのしもべダビデ」と呼ばれている。ダビデ契約の成就が再統一をもたらす。

(2) ダビデ説：復活したダビデが、再統一されたイスラエルの上に立てられる[4]。

a) メシアのことを「ダビデ」と直接的に呼んでいる例が他にない。

b) ここでダビデに与えられている「君主」という称号（ヘブル語でナジー）は、prince という意味であり king ではない。

(3) メシア説：ダビデの子であるメシアが、イスラエルの王として立てられる。

a) 他の預言との整合性、またイスラエルの再統一と回復、そして回復したイスラエルに立てられる王といった文脈をふまえると、ここはダビデ本人よりもメシアを指していると考えるべきである。

b) ヘブル語のナジーには「支配者 ruler」という意味もあり、また「王 king」を意味するメレクと同義で使われていることがある[5]。

(4) 結論

a) 個人的には、これはメシア預言であると思う。しかし、直接「ダビデ」と呼ばれているのがメシア説最大の弱点である。

b) いずれにしろ、ダビデ契約の成就と、民の再統一の関係が強調されている。

c) これがダビデ本人だとしても、究極的には、その上に立つ王はメシアである。

2. 御国の設立

(1) 「ダビデ」の下で、イスラエルは従順な民として回復させられる（24–25 節）。

(2) 「ダビデ」の下で、民は神との契約関係を楽しめるようになる（26 節 a）。

(3) 新しい契約の下で、イスラエルは霊的・物質的に祝福される。そこには「聖所」（神殿）も置かれる（26 節 b）。

(4) これらの出来事により、諸国民にも神が証しされる（27 節）。

(5) イスラエルの回復と御国の計画

a) 神に従順な王の下で、イスラエルが「祭司の王国」として回復させられる。

b) イスラエルの回復は、同じ王が諸国民にも霊的祝福をもたらし、彼らを統べ治めるという御国の計画が成就するために必須条件である。

IV. 神の栄光の帰還と礼拝の回復（40–48 章）

A. 神の栄光の帰還

1. イスラエルが回復させられる時、神の栄光がエルサレムに帰還する。
   (1) 8–11 章：モーセ契約の違反により、神の栄光はイスラエルから離れ去った。
   (2) 40–48 章：新しい契約の祝福により、神の栄光はイスラエルに戻ってくる。

2. 40–48 章では、御国における新しい神殿と約束の地に焦点が当てられている。
   (1) 御国における神殿の描写（40:5–42:20）
   (2) 神の栄光の神殿への帰還（43:1–9）
   (3) 神殿と礼拝に関する規定（43:10–46:24）
   (4) 御国におけるイスラエルの地（47:1–48:35）

B. 御国の神殿

1. 神の地上的王国（御国）では、新しい神殿が与えられる。
   (1) 古代中近東の予言では、特定の出来事や対象物について言及されている場合、読者／聴衆は文字通りの成就を期待した[6]。よって、エゼキエル書 40–48 章から、読者／聴衆は文字通りの新しい神殿を期待したと考えられる。

   (2) 8–11 章において、エゼキエルは文字通りの神殿から神の栄光が離れ去るのを目撃した。よって、8–11 章と対応している 40–48 章もまた、文字通りの神殿に神の栄光が帰還することを教えていると考えられる。

   (3) 新約聖書では、「神殿」という概念は重層的である。
      a) イエスご自身が神殿である（ヨハ 2:19–21）。
      b) 信者は神殿である（I コリ 3:16–17）。
      c) 「礼拝」（神殿での奉仕）は未だイスラエルのものである（ロマ 9:4）[7]。
      d) 「主の日」（苦難の時代）にはイスラエルに神殿が存在している（マタ 24:15；II テサ 2:4；黙 11:1–2）。なお、これは御国の神殿とは異なる。
      e) 将来の文字通りの神殿を期待することは、重層的な神殿理解とは矛盾していない。
      f) 霊的神殿（イエスや普遍的教会）か物理的神殿（患難期の神殿や御国の神殿）

かの「どちらか either/or」ではなく、「どちらも both/and」というスタンスの方が新約聖書的である。

(4) 以上より、エゼキエル書 40–48 章は文字通りの神殿に関する預言と捉えた方が、読み方として自然である[8]。

2. 新しい神殿では、新しい形で礼拝が捧げられる。

(1) 再びレビ人が祭司として立てられる（40:46；44:15 など）。

(2) 動物のいけにえが捧げられるようになる（44–46 章）。

(3) 新しい礼拝制度は、救いの条件ではない。民は既に霊的に回復させられている。

(4) 新しい礼拝制度は、新生したイスラエルおよび諸国民にとって、メシアの究極的犠牲を覚えてヤハウェを礼拝するための新しい表現方法である[9]。

a) モーセ契約におけるいけにえは、メシアの犠牲を指し示す予型（type）であった。

b) 新しい礼拝におけるいけにえは、既に捧げられたメシアの犠牲を回顧する（retrospective）ものになるだろう。

3. 民の礼拝の回復

(1) 民は、モーセ契約に不従順であったが故に、選びの民としての統一性、約束の地の所有、幕屋（神殿）を中心とした礼拝など、様々な祝福を失った。

(2) 35–37 章は、選びの民としての統一性と約束の地での祝福に着目して民の回復が教えられていた。

(3) 40–48 章は、新しい神殿を中心とした民の礼拝の回復が教えられている。

(4) 御国におけるエルサレムには、諸国民も礼拝に上ってくる（詩篇、イザヤ書前編の学び参照）。その礼拝の中心は、新しい神殿である。

預言書における御国の計画のまとめ

1. イスラエルは不信仰（モーセ契約に対する不従順）により裁かれる（預言書全般）。
2. 神はイスラエルと諸国民を罪の故に裁かれる。
   その裁きは世界大の苦難の時であり、「**主**の日」と呼ばれる（預言書全般；特にイザヤ、エレミヤ、ヨエル、アモス、オバデヤ、ゼパニヤ、ゼカリヤ、マラキ）。
3. 裁きの後、王なるメシアが来られ、神の王国が建てられる（詳しくはイザヤ、ゼカリヤ）。
   (1) ダビデの子孫であるメシアによる地上的統治（預言書全般）
   (2) エルサレムの再建（特にイザヤ、エゼキエル、ハガイ）
   (3) 神殿の再建（特にエゼキエル、ハガイ）
4. 王なるメシアの到来によって、イスラエルは聖められ、回復させられる。
   (1) 新しい契約（特にエレミヤ、エゼキエル）
   (2) 霊的回復（預言書全般；より詳しくはエレミヤ、エゼキエル、ヨエル、ゼカリヤ）
   (3) 物質的回復（預言書全般）
      a) 約束の地への帰還
      b) 約束の地の所有
      c) 約束の地における祝福
5. 回復させられたイスラエルは、諸国民を祝福するという「祭司の王国」としての役割を果たす。その結果、諸国民もまたメシアの統治下において祝福される（預言書全般）。
6. 以上のことは、神の無条件契約（アブラハム契約、ダビデ契約など）の成就である（預言書全般）。

[1] 本講義は以下のテキストに基づく。Michael J. Vlach, *He Will Reign Forever: A Biblical Theology of the Kingdom of God* (Silverton, OR: Lampion Press, 2017), 193–206.

[2] Lamar Eugene Cooper, Sr., *Ezekiel*, The New American Commentary (Nashville, TN: B&H, 1994), 206–07; Steven Tuell, *Ezekiel*, Understanding The Bible Commentary (Grand Rapids, MI: Baker, 2008), 131.

[3] Ralph H. Alexander, *Ezekiel*, The Expositor's Bible Commentary, revised edition, eds. Tremper Longman III and David E. Garland (Grand Rapids, MI: Zondervan, 2010), Kindle edition, location 4734; Charles H. Dyer and Eva Rydelnik, "Ezekiel," in *The Moody Bible Commentary*, eds. Michael Rydelnik and Michael Vanlaningham (Chicago: Moody, 2014), 1232.

[4] Arnold G. Fruchtenbaum, *The Footsteps of the Messiah: A Study of the Sequence of Prophetic Events*, rev. ed. (San Antonio, TX: Ariel Ministries, 2003), 396–97.

[5] I サム 9:16；II サム 3:38；エゼ 12:10、12 参照。Dyer and Rydelnik, 1254; Charles Lee Feinberg, *The Prophecy of Ezekiel: The Glory of the Lord* (Eugene, OR: Wipf and Stock, 2003[1969]), 198.

[6] Richard Hess, "The Future Written in the Past: The Old Testament and the Millennium," in *A Case for Historic Premillennialism: An Alternative to "Left Behind" Eschatology*, eds. Craig L. Blomberg and Sung Wook Chung (Grand Rapids, MI: Baker, 2009), 30.

[7] Douglas J. Moo, *The Epistle to the Romans*, New International Commentary on the New Testament (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1996), 565.

[8] Hess, 32–33.

[9] エゼキエル書 44–46 章における新しい礼拝制度に関する詳細な議論は、以下を参照のこと。Dyer and Rydelnik, 1268–70; John C. Whitcomb, "Christ's Atonement and Animal Sacrifices in Israel," *Grace Theological Journal* 6/2 (1985): 201–17; Fruchtenbaum, Randall Price, et al., "The Purposes of the Millennial Sacrifices," *Ariel Ministries Magazine* (Fall 2016): 8–12; アーノルド・フルクテンバウム『イスラエル学–組織神学の失われた環–』佐野剛史訳、中川健一監訳（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ出版部、2018 年）312–16 頁。